

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720260

研究課題名(和文) 小学校にて外国語動機と積極的参加の質的・量的調査

研究課題名(英文) A mixed method investigation of foreign language engagement and motivation

研究代表者

オオガボールドウィン クイント(Oga-Baldwin, Quint)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20536304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：自己決定理論をとると、児童が自分の中の価値と教員が作る教室環境を踏まえ、学習へ取り組む。本研究では、高学年の小学生を縦断的に外国語への動機付けを計った。モチベーションが高まった教員は幾つかの重なった指導法を利用した。この教員が授業を楽しんでいるように見られた。担任の先生らが積極的に英語の授業に参加していた。諸々の活動が速いペースで進められた。児童らが英語で理解できるため、担当した教員が明確な手法を用いていた。結論として、小学校にての外国語授業で教員の温かみ、担任の関与、適切なペース、双方向のルーティン活動、分かりやすさや、活動のバランスの授業手法を用いた教員が子供のモチベーションを高めた。

研究成果の概要(英文)：According to Deci and Ryan's (1985) self-determination theory, motivation comes from the interplay of the self and the environment. Applied to educational settings, this means that both students' internal values and the environment created by the teacher come together to engage students in learning tasks. This study followed a single cohort of students across their first two years of foreign language study in elementary school. The study sought to show the influence of the teaching environment on students' long term motivation for learning a foreign language. Results indicate that students are responsive to teachers' choices and instructional practices. Specifically, teacher warmth, homeroom teacher involvement, appropriate pacing, comprehensibility, interactive routines, and balance of activities help to create a motivating classroom environment for elementary students. These practices may be used in pre-service and in-service teacher training to improve student motivation.

研究分野：外国語教育

キーワード：授業構成 モチベーション 自律支援 自己決定理論 外国語活動教授法 混合方法研究 縦断的調査

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「自己決定理論(Deci & Ryan, 1985)」によれば、児童児童らを動機付けるためには、教員らを作る「授業環境」がとても大切である。この理論によると、自分の「やる気」とは、次の4種類がある、つまり、1)「外から影響されてのやる気(=外発的調整)」、2)「本人と近い外部の人間から影響されるやる気(=取入的調整)」、3)「内発的な面に合致したやる気(=同一視的調整)」、4)「自分自身で決定したやる気(=内発的調整)」と多岐にわたるものである。

(2) 学習活動における「内発的調整」とは、行っている担当課題そのものが児童自身にとり刺激的なものであり、課題そのものを完遂させる行為や完遂自体に意義があり、新しいことを勉強し知る事が楽しいものと感じる受け止め方である。現在の学習指導要領(文部科学省, 2008)に基づくと、外国語活動こそが「内発的自己調整」を高める手段として英語を取り組ませるべきであると考ええる。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、将来の外国語活動を行う教員がより効率的な指導が出来るようにするため、また日本的な外国語活動のあり方の理論を作り上げるために、児童の外国語に対するモチベーションと授業取組みについてアンケートを実施し、実際の小学校外国語活動へ参加し、活動をビデオ撮影して分析するとともに内容を記述する。

この研究での具体的な調査内容:

外国語活動では、教員の授業構成や学びの環境をどう作っているのか。

現在の5・6年生の児童は外国語活動に対して、どれくらい意欲的に参加しているのか。

児童の外国語活動への参加態度とモチベーションの観念がどのような関係にあるのか。

5年生の始めから6年生の終わりにおける児童の外国語活動に対する参加態度とモチベ

ーションが長期的にみてどのように変わってくるのか。

## 3. 研究の方法

(1) 英語学習におけるモチベーションを尋ねるアンケート調査を児童らに対して3回行った: 2013年4月、2014年3月、2015年3月である。これら一連の調査では、外発的調整、取入的調整、同一視的調整、内発的調整を測定した。児童らに対しては、更に、「自分らの教室環境をどう思っているか?」の調査(複数)も行った。

(2) 児童らのアンケート調査報告内容を確認する目的で、教室内のビデオ映像も撮影された。ビデオを用いて、児童らの教室環境を確認する事とした。評定者らは当該ビデオ映像を見て、当該教室の児童らを1つの集団(グループ)とみなして、その英語学習活動への従事状況を、授業時間の各分毎に、1~5までの評価点数で評定した。この評価者らは、大学の教育学部生らである。その後、児童らへの調査結果と照らし合わせて、当該のビデオ映像を分析し、過去2年間で学習動機が増加した英語授業での特徴を把握する事に努めた。学習への動機が最も大きな増加を見せた学級を調査し、教室環境や児童の動機に影響をもたらす教員側の授業姿勢を特定する事に努めた。

(3) 今回の調査では、各学級を、分析対象となる主たるグループとして考慮した。教員や児童のプライバシーの保護目的で、学級は、AからPまでの名称を付し、学校間の関連性などに関係なく報告をおこなっているものである。

## 4. 研究成果

(1) 学級全部で、児童らは、「同一視的自己調整」が最も強いと評価した。児童らは、英語は楽しいと感じている一方で、英語が役立つから主に英語を勉強していた。同様に大抵の児童らにとって、勉強に対する理由については、外発の理由よりも内発の理由のほうが高いものと分かった。この傾向は、全体的に、学習が進むとともに

高まった。図1参考。

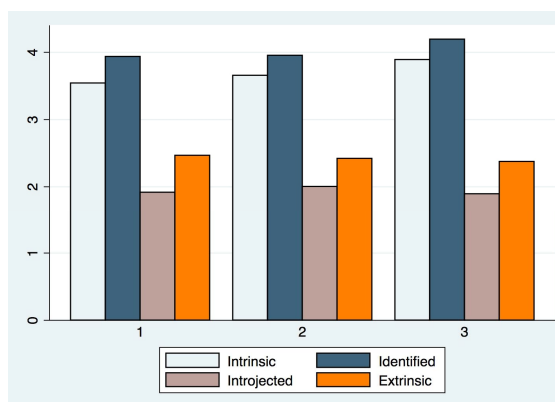


図1. Intrinsic = 内発的調整 Identified = 同一視的調整  
Introjected = 取り入的調整 Extrinsic = 外発的調整

(2) 個々の学級を見てみると、幾つかの学級では、内発的調整に注目すべき向上が見られ、外発的調整に減少が見られた。学級 E、学級 K、学級 M および学級 N は全て、この傾向である。全学級の平均スコアは表1の通り。

(3) 英語授業への参加についての児童らの自己報告と、評価者らの評価とを比較した。児童らの自己評価は、全体的に見て、上記の外部評価者らによる評価よりも高いものであった。これらのスコア(点数)については平均を算定し、統合し、後の分析に用いる事とした。これらのスコアについては表2の通り。

(4) 教室環境及び授業への参加具合を尋ねる児童らのアンケート調査を用いて、クラスが3つのグループに分類された。これらのグループ、並びに、グループ分類の基となったスコアについては表3の通り。スコアが最も高いグループにも学級E、K、MおよびNが含まれる結果となった。これらのグループについては、児童らの授業への参加度合のスコアとの比較に用いられた。図2の棒グラフの通りである。上記の学級を合わせると児童らの英語授業への参加度合の点数が最も高いものであった。

(5) 上記のクラスでは授業への参加度合が非常に高く、評価も高いものであったし、モチベーションの点で向上も見られた。この事実に基づき、これらの学級での担当教員らの授業実施手法

が、その児童らに好ましい影響を及ぼしたと結論付けられる。従って、これらの学級について、ビデオ映像を用いて、更に、調査を行った。

表1. クラス別の動機調整の変化。内発的調整が高めながら外発的調整が抑えた学級が強調されている。

学級	時期	内発的動機	同一視的調整	取り入的調整	外発的調整
A	平成25年	3.24	3.87	1.91	2.46
	平成26年	3.46	3.92	2.02	2.62
	平成27年	3.46	3.73	1.53	2.57
B	平成25年	3.14	3.40	1.75	2.55
	平成26年	3.42	3.66	2.04	2.52
	平成27年	3.61	3.95	1.93	2.75
C	平成25年	3.37	4.01	1.96	2.66
	平成26年	3.24	3.44	2.02	2.72
	平成27年	3.64	4.01	1.97	2.46
D	平成25年	3.52	3.78	2.01	2.43
	平成26年	3.49	3.81	1.86	2.39
	平成27年	3.96	4.28	1.99	2.41
E	平成25年	<b>3.66</b>	4.03	2.13	<b>2.36</b>
	平成26年	<b>3.86</b>	4.31	2.00	<b>2.35</b>
	平成27年	<b>4.25</b>	4.53	1.73	<b>2.14</b>
F	平成25年	3.94	4.13	1.88	2.13
	平成26年	3.88	4.05	2.24	2.08
	平成27年	3.68	4.12	1.84	2.31
G	平成25年	3.31	3.90	1.93	2.28
	平成26年	3.60	3.83	1.84	2.40
	平成27年	4.15	4.39	1.84	2.20
H	平成25年	3.32	3.71	1.67	2.90
	平成26年	3.29	3.54	1.63	2.90
	平成27年	3.19	3.62	1.64	3.10
I	平成25年	3.69	4.09	1.61	2.53
	平成26年	3.48	3.98	1.72	2.46
	平成27年	4.02	4.36	1.74	2.33
J	平成25年	3.17	3.65	1.75	2.69
	平成26年	3.45	3.89	1.73	2.92
	平成27年	3.52	3.97	1.93	2.86
K	平成25年	<b>3.69</b>	3.82	2.26	<b>2.54</b>
	平成26年	<b>4.11</b>	4.18	2.39	<b>2.33</b>
	平成27年	<b>4.67</b>	4.77	2.22	<b>1.85</b>
L	平成25年	3.86	4.23	2.15	1.86
	平成26年	3.83	4.20	2.35	2.25
	平成27年	4.14	4.31	1.72	2.27
M	平成25年	<b>3.85</b>	4.27	2.25	<b>3.17</b>
	平成26年	<b>4.22</b>	4.39	2.08	<b>2.17</b>
	平成27年	<b>4.59</b>	4.68	1.95	<b>1.61</b>
N	平成25年	<b>3.72</b>	4.16	1.77	<b>2.43</b>
	平成26年	<b>3.85</b>	3.99	2.20	<b>2.17</b>
	平成27年	<b>4.20</b>	4.55	2.13	<b>1.95</b>
O	平成25年	3.73	3.93	1.91	1.99
	平成26年	3.90	4.27	2.16	2.07
	平成27年	3.67	3.98	2.05	2.84
P	平成25年	3.76	4.11	1.77	2.26
	平成26年	3.93	4.20	1.95	1.92
	平成27年	3.91	4.14	2.28	1.86

表 2. 授業中の取り組み

学級	評者1	評者2	児童の自己評価
A	4.30	4.20	4.04
B	2.77	2.95	4.61
C	3.58	3.63	3.87
D	3.04	3.04	3.72
E	3.42	3.64	4.21
F	3.42	3.40	4.11
G	3.25	3.42	3.91
H	3.00	3.00	3.72
I	2.67	3.08	3.90
J	2.64	2.86	3.68
K	3.53	3.39	4.41
L	4.00	3.59	4.25
M	3.77	3.64	4.35
N	3.37	3.37	4.10
O	3.26	3.17	4.35
P	3.77	3.64	4.17

表 3. 授業環境の評価

学級	子どもからの授業環境評価平均点	授業環境グループ順位
A	4.04	2
B	3.73	1
C	3.68	1
D	3.65	1
E	4.44	3
F	4.04	2
G	4.10	2
H	3.81	1
I	3.94	2
J	3.81	1
K	4.42	3
L	4.31	3
M	4.24	3
N	4.29	3
O	4.23	2
P	4.11	2

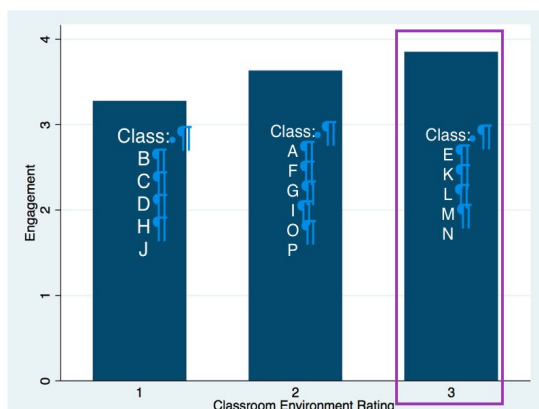


図 2. Engagement = 児童の授業取り組み Classroom Environment Rating = 授業環境評価

6) ビデオ映像分析: 上記の学級 E、K、M、N での教員らの授業手法を分析し、その手法に見られる共通点を見出そうと努めた。なお特記事項であるが、上述の4つの学級は、それぞれ異なる学校から採ったものであり、それぞれ異なる外国語補助教員(ALT ら)でのクラスである。つまり、この4人のALT らは、授業手法について、いずれかの一人の教員による手法を倣ったものではない。今回観察した学級のほぼ全てで、今回のALT が、「主導的なメインティーチャー」を務め、片や、担任、或いは、日本人の英語教員(JTE)が、「補佐」の役割を行った。今回分析をし

た英語活動時間の特長は、次の通りで、「教員の温かみと楽しさ」、「授業のペース」「担任の参加」、「分かりやすさ」、「双方向のルーティーン活動」、「諸活動のバランス」という特徴が見られた。この特長の各々について簡単に下記に見ていく。

(7) 教員の温かみと楽しさ: 高評価のクラスではどれも、担任とALT は、授業を楽しんでいるように見られた。どちらの先生もよく笑顔を作り、英語を教える事が好きのように真に思えるものであった。担任は英語を教えるのに神経質になったり、恥ずかしがらず、ALT たちも、児童らの振る舞いに過度に厳しいという事ではなかった。教員らは複数の歌を歌い、教室のドアの所で児童らに挨拶をし、個々の児童を名前呼んでいた。双方向性のゲームを複数行いながら、教員らもゲームに興じながら、できるだけ多くの児童らに話しかけるようにしていた。

(8) 担任の英語授業への参加: 温かみがあり友好的な雰囲気と共に、高評価の高い学級ではどれも、その担任らが積極的に英語の授業そのものに参加しているクラスであった。ALT らとJTE らが、今回観察した英語授業のすべてをけん引していく訳であるが、これら先生方は常にALT と共に教室内に留まっており、学級担任らが、英語の指導の助成/英語の使い方のデモンストレーションのお手伝いをしていない場合には、こうした担任は、自身らも英語の練習をし、児童らと歌を歌い、英語ゲームに興じていた。こうした先生らが、児童らにとって、良い学習者のお手本を呈しているのであった。

(9) 授業のペース: こうした授業の全てにおいて、諸々の活動がとても早いペースで進められた。教員らがプリントを配布している間、児童らはそれを待つと云った事が殆どなかった。教員らの中には、プリントの配布行為そのものを、クラスルーム活動にしていた先生もいた。例えば、タイマーを設定し、時間をカウントしながら、或いは、歌を歌ったり、演じたりして、そしてその間に

児童らにプリントを渡すのであった。こうした工夫により、児童らは退屈をせずに、課題作業に取り組む事ができた。色々な活動も、全体的にはかなりの短めの時間で、全般的には、5分未満のものであり、長い活動でも10分程度のものであった。他の多くの授業では、授業時間の最後の枠に、時間を要するゲーム、例えば、「インタビュー活動」や「オープンエンド型のロールプレイング」を取り入れる。こうした活動は、授業時間の5割を要するような活動であるが、今回の高評価対象の授業では、こうした「オープン(自由)形式の活動」も比較的短く活動された。こうした工夫により、児童らは授業の間、活動や作業を連続的に行う事が出来て、なお且つ、児童らが活動を自ら中断する事を防ぐ効果もあった。

(10) 分かりやすさ: ALTらが、調査対象の殆ど全ての授業で主導的教員として活動していたので、児童らは、殆ど全体的に英語での指導を受けた。同時に、児童らが授業の理解ができる為の取り組みを、全てのALTらが実施している訳ではなかった。他のクラスではALTらはJTEや担任に通訳をさせたりしていたが、高評価の学級については、担当のALTらは、通訳を介さずに、児童らが諸活動について理解ができるための明確な手法を用いていた。高評価の学級については、担当のALTら、JTEら、そして担任らがジェスチャーをしたり、実演をしたり、或いは、指示内容を英語から日本語に翻訳する前に、予め、児童らに日本語で指示内容を説明させる等をしていた。こうした工夫により児童らが英語を耳で聞く事に慣れるばかりでなく、自分の能力達成感をも育むものであった。

(11) 双方向のルーティーン活動: 高評価を得た授業で用いられたルーティーン活動は、普段のお決まりの活動に基づくものであった。天気や日付を児童らに尋ねる以外に、グループソング、グループ活動、ダンス活動、更には、通常のクラス活動やゲーム(児童らが教員側からの説明を受けないでできる活動)に、教員らは児童らに従

事させた。こうしたルーティーン化された活動は、ローテーションで循環させ、定期的に、活動順序を回転させ、児童らが飽きないように取り組むを行った。同時に、活動順序のローテーションを組む事により、児童らが、次にどんな活動が来るか予測できるようになる為、安心感を児童に持たせる事にもなった。更に、活動の多くは、2年間の間に何度も繰り返し行われた。

(12) 色々な活動のバランス: 大抵の授業では、授業の最後に時間を要する活動(例えば、インタビューゲームやロールプレイ)を組み込む事に重きを置いていたが、高評価を得た授業では、クラスの最後に行う活動として、多種のゲームを用いて英語を練習するようにしていた。色々な歌、チャンツ、テキストでの活動、ワークシート、問題ドリルを用いて、対象言語の練習をしていた。こうした活動は、ローテーションを組み、ルーティーン化された活動に組み込まれたり、或いは、ルーティーン活動を用いて、授業のペースを維持するように工夫をしていた。色々な点から対象言語の練習法を示す事で、教員らは児童らが当該言語になれる手助けをしていた。確実化させる事ができるものである。

#### <引用文献>

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behaviour*. New York: Plenum.

文部科学省. (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. 東京: 東洋館出版社.

#### 5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計4件)

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2015). Structure also supports autonomy: Measuring and defining autonomy-supportive teaching in Japanese elementary foreign language classes. *Japanese Psychological Research*, 1-13. doi: 10.1111/jpr.12077 査読有り

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2014). Supplementing the elementary foreign

language course of study with a self-determination framework. *International Journal of Curriculum Development and Practice*, 16(1), 13-26. 査読有り

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2014). Optimizing new language use by employing young learners' own language. *ELT Journal*, 68(4), 410-421. doi: 10.1093/elt/ccu010 査読有り

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2013). Native vs. non-native teachers: Who is the real model for Japanese elementary school pupils? *The Journal of Asia TEFL*, 10(2), 91-113. 査読有り

[学会発表] (計 10 件)

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2014). Assessing engagement in upper elementary foreign language classes. Poster presented at the 2014 Motivational Dynamics and Second Language Acquisition Conference, August 30, Nottingham, UK.

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2014). Structure can support autonomy: Validating a short measure of autonomy supportive structure in Japanese elementary schools. Paper presented at the Biennial International Conference on Motivation (EARLI SIG 8), June 12, Helsinki, Finland.

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2014). Optimizing new language use by employing young learners' own language. Paper presented at the 2014 Conference of the American Association for Applied Linguistics, March 22, Portland, OR, USA.

Oga-Baldwin, W. L. Q., (2013). Looking in classrooms for autonomy supportive teaching: Consolidating practices for teacher education. Keynote speech presented at the International Conference on Teacher Education-Focusing on Teaching Materials and Methods Course, November 29, Taipei, Taiwan.

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2013). Structure predicts engagement and need satisfaction in the Japanese elementary school context. Paper presented at the Joint SELF Biennial International Conference and ERAS Conference 2013, September 11, Singapore.

Oga-Baldwin, W. L. Q., (2013). Structure as a predictor of self-determined motivation in elementary foreign language classes. Poster presented at the European Association for Research in Learning and Instruction 15th Biennial Conference 2013, August 28, Munich, Germany.

Oga-Baldwin, W. L. Q., (2013). Structure as

a predictor of self-determined motivation and engagement in the elementary language learning environment: A mixed-methods approach. Paper presented to the Junior Researchers of EARLI 2013 Pre-conference, August 26, Munich, Germany.

Oga-Baldwin, W. L. Q., (2013). Mixed-method validation of a measure of classroom structure for elementary language classes. Paper presented to the Language Education & Technology: Methodology SIG Meeting, June 25, Osaka, Japan.

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2012). The influence of teacher modeling on elementary students' foreign language learning behavior. Poster presented at Japanese Association for Educational Psychology Convention 2012, November 23, Okinawa, Japan.

Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2012). A pilot study of elementary English engagement. Paper presented at The 38th JALT International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, October 14, Hamamatsu, Japan

[図書] (計 1 件)

Oga-Baldwin, W. L. Q. (2015). Supporting the needs of twenty-first century learners: A self-determination theory perspective. In C. Koh (Ed.), *Motivation, Leadership and Curriculum design: Engaging the Net Generation and 21st Century Learners* (pp. 25 - 36), doi: 10.1007/978-981-287-230-2\_3. Singapore: Springer.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

オオガ - ボールドウィン クイント  
(OGA-BALDWIN, Quint)

福岡教育大学・英語教育講座 准教授

研究者番号: 20536304 (2) 研究分担者

### (2) 研究協力者

中田賀之 (NAKATA, Yoshiyuki)